

ICF-CY チェックリスト開発の試み (発表論文集レジュメ一部修正版)

—個々の「学習上又は生活上の困難」を把握するために—

○徳永亜希雄^{*1} 小林幸子^{*2} 田中浩二^{*3} 大関毅^{*4} 川口ときわ^{*2} 二階堂悟^{*5} 溝端英二^{*6/*1} 松村勘由^{*1} 加福千佳子^{*7}
(^{*1} 国立特別支援教育総合研究所) (^{*2} 静岡県立中央特別支援学校) (^{*3} のあ保育園) (^{*4} 茨城県立協和養護学校)
(^{*5} 秋田県立秋田きらり支援学校) (^{*6} 和歌山県立紀伊コスモス支援学校) (^{*7} 青森県立弘前第一養護学校)

KEY WORDS: ICF-CY チェックリスト 学習上又は生活上の困難

(趣旨と目的) これまでの ICF 又は ICF-CY (以下、ICF/ICF-CY) を活用する実践報告の中では、ICF/ICF-CY の項目によるチェックリストを初期評価に用いたり、既存の子どもの情報を「ICF 関連図」等で整理した後に、見落としがないかを確認するために用いたりすることを通して実態や課題を整理する取組が散見される。生きることの全体像 (大川, 2007) とされる ICF の分類項目は、見落としなく全体像をつかむためのチェックリストとして役立つとされる (上田, 2005)。1,400 を超える項目を有する ICF の実践的活用の手だてとして、WHO からはデータセット例やチェックリストが示され、また、目的別の項目のセットについての研究成果も報告されているが (Stucki et al., 2003 等)、それらは疾患別等の医療ベースのものが多く、特別支援教育にそのまま持ち込むにはなじまない。また、ICF-CY では 200 以上の項目が追加拡充されているため、さらなる工夫が必要と考えられる。日本の特別支援教育においても WHO のチェックリストを修正して活用する等の取組が見られるが、定量的な開発手続きが明示されたものは見当たらない。一方、文部科学省 (2009) は「障害による学習上又は生活上の困難」について、ICF との関連でとらえることの必要性について述べている。

そこで、本研究では ICF よりも項目が充実した ICF-CY を用いたチェックリストは、個々の学習上又は生活上の困難を把握するのに役に立つものと考え、その開発に取組んだ。徳永ら (2010) は、調査の数値結果に基づいた項目抽出について第 1 報として報告しているが、ここでは、企画段階から参画した ICF-CY、ICF チェックリストの実践的活用、発達検査等の開発手続きに精通した者 5 名による協議を通してより特別支援教育実践に役立つ項目を検討することを目的とした。

(方法) ①概要: ICF-CY 第 2 分類の合計 283 の項目について個々の「学習上又は生活上の困難」を把握するためのチェックリストの項目としての必要度等について、0~100 の線上に印を記入するビジュアルアナログスケール (以下、VAS) を用いた調査票を通して尋ねた。②**調査対象:** 国立特別支援教育総合研究所の ICF-CY 関連研究等にこれまで研究協力をしたことのある者や、同研究所職員が講師を務めた ICF-CY 関連研修の参加者等とその者の紹介者で、ある程度 ICF-CY について知識がある者。③**調査期間:** 2009 年 8~10 月。④**調査内容:** 回答者及び回答者が回答の際に想定した事例の属性及び各項目 (心身機能 (以下、b)、身体構造 (以下、s)、活動と参加 (以下、d)、環境因子以下、e) の必要度等について問う調査票について、回答者が電子化版又はテキスト版を選択して回答した。それぞれの内容は以下の通り。***想定した事例:** 在籍機関、障害種別等。***回答者:** 職種、教職経験年数、障害種別等。***必要度等:** 想定事例の「学習上又は生活上の困難」を大まかに把握するための項目として必要度。回答には横幅 10 cm の VAS を用い、「必要でない (無視できる)」から「必要である」までの線上に感覚的な回答の記入を求めた。また、該当項目が不要かどうか、項目の意味がわかりづらいかどうかについても尋ねた。⑤**調査票の授受:** 回答者及び回答窓口担当者に対して、手渡し・email 添付・郵送のいずれかの方法で調査票を届け、調査の趣旨及び方法について、直接・電話・email のいずれかで説明した。⑥**調査票等:** Microsoft 社の excel で作成した電子化版と紙ベースのテキスト版の調査票を用意し、回答者が回答方法を選択した。電子化版・テキスト版共に各項目の定義が分かるような設定

にし (定義がない s は除く)、併せて説明資料等も配布した。⑦**VAS の計測:** 電子化版については自動的に 2mm 毎の数値が出るように設定 (回答者には見えない設定) し、テキスト版については定規で 2mm 毎の計測をし、端数は切り上げた。VAS=2 以上を「必要の程度」とし、VAS=0 は「不要」とした。⑧**分析:** 第 1 に b:83 項目、s:40 項目、d:96 項目、e:64 項目、合計 283 項目それぞれの VAS による「必要の程度」の中央値、および「不要」とされた度数を算出した。第 2 に、b、s、d、e のそれぞれの項目群での「必要の程度」の中央値の平均値および「不要」の度数の平均値を算出した。第 3 に、チェックリスト試案の作成のための項目抽出として、それぞれの項目群からできるだけ均等に項目抽出を行うことができるように、各項目群内で「必要の程度」が一定以上高く、「不要」の度数が一定以上低い項目を抽出することとし、1) 項目の「必要の程度」の中央値が項目群の中央値の平均値よりも高い、2) 項目の「不要」の度数が項目群の「不要」の平均値よりも低い、のいずれかに該当する項目を抽出した。第 4 に、これらの結果と想定した事例及び回答者の属性に関する検討結果を基に前述の 5 名で検討し、項目の再抽出をした。

(結果と考察) 計 85 の学校等及び研究協力者・本研究の研修員を対象とした結果、72 の学校等から回答があり、合計 353 件の調査票を回収した (有効回答=351 件)。VAS による「必要の程度」の中央値の平均値は、b:71.78、s:46.55、d:81.59、e:59.84 となった。「不要 (VAS=0)」の回答頻度の平均値は、b:62.36、s:120.98、d:48.60、e:92.19 だった。結果、b:83 項目中 54 項目、s:40 項目中 24 項目、d:96 項目中 73 項目、e:64 項目中 31 項目、合計 182 項目が抽出された。これらについて前述の 5 名で検討した結果、想定事例及び回答者の属性から視覚障害や聴覚障害にかかわるデータ数が相対的に少なかったことから b、s、e の視覚障害に関連すると考えられる項目、d の聴覚障害に関連すると考えられる項目等 12 項目を加えたり、逆に肢体不自由にかかわるデータ数の相対的な多さを踏まえて b における関連する項目 6 項目を精選したりする作業を行った。その結果、b:49 項目、s:27 項目、d:79 項目、e:33 項目、合計 188 項目が抽出された。本研究では、まずは特別支援教育全体での活用を想定した汎用性の高いチェックリストとして、取りこぼしの少ない項目のセットのための 188 項目を抽出した。しかし、この項目数は実用性という点ではまだ課題が残されており、多様な視点を持ちながらさらに選定を進める必要があると考えられる。また、併行して開発している電子化ツールに実装し、学校現場等で実証することを通して、より実用性の高いものにしていく必要があると考えられる。

(主な文献) ○大川弥生 (2007). 生活機能とは何か—ICF: 国際生活機能分類の理解と活用—. 東京大学出版会, ○Stucki G. et al (2003). Value and application of the ICF in rehabilitation medicine. DISABILITY AND REHABILITATION, Vol. 25, No 11-12 ○徳永亜希雄・小林幸子・田中浩二・松村勘由・加福千佳子 (2010). 特別支援教育における ICF-CY チェックリスト開発の試み—学習上又は生活上の困難を把握するための項目の抽出を中心に—, 同研究所「特別支援教育における ICF-CY の活用に関する実践的研究」成果報告書。○上田敏 (2005). 国際生活機能分類 ICF の理解と活用 人が「生きること」「生きることの困難 (障害)」をどうとらえるか。きょうされん。